■ 映学社、秩父で「市民安全啓発映画祭」を開催

『パパは風になった』など 4 作品を特別上映、髙木裕己氏が特別講演

㈱映学社は 11 月 25 日、「市民安全啓発映画祭」（共催：秩父市セーフコミュニティ推進協議会、秩父市、日本市民安全学会）を、埼玉県秩父市に完成した秩父宮記念市民会館 大ホールで開催した。

初開催となった「市民安全啓発映画祭」は、第 15 回「日本市民安全学会秩父大会 市民安全・安心フォーラム 2017 in ちちぶ」の第 1 部、秩父市セーフコミュニティ国際認証 2 周年記念、さらに、会場となった秩父宮記念市民会館の開館記念特別企画という 3 つの位置づけで開催されたもの。

日本市民安全学会は、「市民の安全」について、市民による市民のための「市民安全学の研究」を深めることを目的として 2004 年 4 月に設立された学会。市民が中心となりながらも、市民・警察・自治体が三位一体となり、市民安全学の発展・普及および研究者相互の連携・協力を図る活動を展開しており、映学社 代表取締役社長の髙木裕己氏が顧問の 1 人をつとめている。

映像の中で安心安全をどう描くか

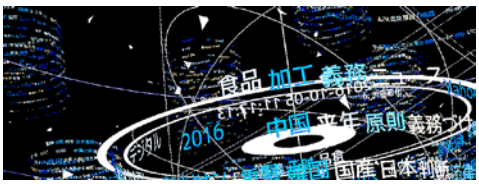
映画祭ではまず、秩父市総務部長の町田恵二氏が歓迎の挨拶を述べ、秩父を舞台に映学社が制作した交通安全教育映画『パパは風になった』（文部科学省選定、一般社団法人 埼玉県交通安全協会推薦）を上映したのに続き、髙木氏が特別記念講演「映像の中で安心安全をどう描くか」を行った（←写真）。

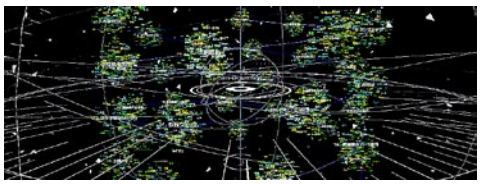
『パパは風になった』は、ドライバーの不注意による交通事故で失った最愛の夫を供養するため、5 歳の娘を連れて巡礼の旅に出る妻の悲しみや様々な思いを通して、ドライバーに対してハンドルを握る責任の重さを強く認識させる作品。

髙木氏は、同作品を制作した背景として〈この映画は実話に基づいて創作したもの。この作品の前に、事故を起こしたドライバーの視点で作った『悲しみは消えない～飲酒運転の代償～』を観た被害者の会の方から、「大きな悲しみを持ち続ける被害者の立場での映画」を提案された。大きな悲しみを抱えて生活している沢山の被害者家族を取材していく中で、小さな子どもを抱え、これからの生活を何とか乗り越えると同時に、夫の供養をしたいとの思いから巡礼をしている女性の手記を読み、「これは映画にできる」と直感した。映像の力によって、加害者による償いの思いと被害

BEYOND THE STANDARD ◎ 情報の可視化

映像の枠を超え、様々な領域に拡がるオムニバス・ジャパンの取り組みをご紹介します。





Twitterの今現在のトレンドワードとその関連ワードをリアルタイムに美しく表現するインフォメーションアート「BiRDS」

OMNIBUS JAPAN

者の間にある“ギャップ”を埋めていきたい。それも教育映画に与えられた 1 つの使命だと考えている〉と語った。また、髙木氏（写真→）は、子宮頸がんワクチンの副作用やネット社会における誹謗中傷、インドネシアにおける日本アニメの視聴状況、「認知症を知らない人のいない町づくり」を推進する福井県敦賀市などの事例を挙げ、〈これらの問題にはそれぞれの中で生じる“ギャップ”が大きな問題。こうした“ギャップ”を埋めていくためには、様々な問題を正しく知ることが重要。正確な情報を広く提供し、共に歩む社会を作っていくことが、安心安全につながっていく〉と語った。

さらに、“映画の神様”をキーワードに制作中のエピソードを紹介。〈雨降りのシーンには 3 トントラックに水を満杯にしたタンクを用意し、10 人がかりで雨を降らせた。当日は朝から晴天でなかなか雨足が映像に映らず、何度もタンクに水を溜めて撮影を行ったために非常に時間がかかったが、映画の現場にいる「映画の神様」のおかげで、無事撮影を終えることができた〉〈また、70 ～ 80 人をオーディションした中から選ばれた子役の山田菜々香さんは秩父の三峯出身。その縁を結んでくれたのは、やはり「映画の神様」だと思っている〉と述べた。

映画しか伝えられない『公助・共助・自助』の今

続いて、「映画しか伝えられない『公助・共助・自助』の今」と題し、映学社が制作した 3 本の社会教育映画を上映した。

『事故や事件から 人を守る 町を守る 警察しょのはたらき』（文部科学省選定／ 2017 年教育映像

祭優秀作品賞）について、山下弘忠氏（元警視庁鑑識課管理官／写真→）は〈昨年 4 月に映学社の担当者から協力依頼があった。映学社がこれまで警察のビデオを制作してこなかったことに驚いたが、警視庁の窓口である広報課にお願いし、制作が実現した。伊勢志摩サミット警護の関係で、制作が開始されたのは 10 月。拠点として高島平警察署を提案した。作品は非常にコンパクトに仕上がっており、警視総監や幹部に見せると大変好評だった。教育映像祭でも「身近な交番勤務の警察官を通じた内容は児童にも親しみやすく、わかりやすい。教材資料として価値も大きい」と評価されている〉と解説。

また、『火災から 人を守る 町を守る 消防しょのはたらき』（文部科学省選定）を監修した小澤光男氏（前横須賀市北消防署副所長／←写真）は、〈去年 3 月に定年退職を迎えたが、懇意にしていた映学社の担当者から「消防署に 24 時間密着し、その仕事を紹介する作品を作りたい。是非出演して欲しい」との依頼があった。関東学院大学で「消防の理論と実務」の非常勤講師をつとめており、様々な場面で消防の仕事を PR しているが、今回は小学生向けの防災・防火の啓発ビデオに協力でき、いい思い出になった。警察は都道府県単位だが、消防は自治体・広域自治体単位で編成されており、予算や地域性も様々。この作品はあくまでも横須賀市のことを映像化したもの〉と紹介した。

さらに、『防げるか？認知症 注目される食の力』について、村瀬恵子氏（葛西昌医会病院 医療支援課 地域連携課長／写真→）は〈認知症を防ぐために“食”は非常に重要な要素。「食べられる環境」によって元気になったという事例を何万と目の当たりにしている。入院中は看護士や栄養士など色々な職種の方に助けられるが、いざ帰宅した時に、食事のこと、栄養の偏りなどが不安になっても、栄養士や理学療法士、言語聴覚士、作業療法士、歯科医師などがタッグを組む多職種連携によって素晴らしいパワーが生まれるので安心して欲しい。私たち医療従事者として、この映画を通じて「元気でいつづけること」「認知症は防げる病気であること」をお伝えしたい〉と述べた。

◇日本市民安全学会　http://www.shimin-anzen-gakkai.org/
◇映学社　http://www.eigakusya.co.jp/